

2016年02月19日

昨日でしなければならない書類づくりは終わった。その後書評を一つ片づけて、午後に県共同文書館の会議があり、終了後、どうしたものかと考えたが、箱崎の研究室で基礎研の原稿に取りかかった。集中力が切れてきたので休呆堂でがんばるも眠いので帰った。

なので、今朝は荷物の準備と基礎研の原稿だ。四時から文書館委員会なので、午前中はかなり集中してすすめた。午後早めにと二時前に家を出る。しかし、香椎あたりで渋滞。結局原稿を書くなどという余裕なく会議となった。次期副館長の指名という議題で、退任する僕の挨拶が求められる。大学史料室時代からの歴史を語って挨拶に代えた。それはこの経緯を知らない事務職員に当ててのメッセージであったが通じたかな。

で、研究室に戻り、基礎研の原稿にかかった。これは僕の退職記念号だ。論文じゃないからラフになってもいい。ていうからラフな部分も載せたい。

結果的に中野光先生を持ち上げてしまった。中野光は大正自由教育神話を作ってしまった人物だ。彼はその名作『大正自由教育の研究』を絶版にした。その意味は大きい。中野先生が意識して絶版にした部分がどこかはお本人のみが知るところだろう。しかし、四〇年後に書いた『学校教育の史的形成』では木下竹二を「転向」したという評価は消え、「天皇を信仰していた」という書き方になっている。

そういう感じで原稿を仕上げ、担当の大森さんに送って娑婆の業務は完了した。荷物を改め、研究室を出る。けっこうリュックは重い。シーパップのせいだろう。だいぶ改良されたが、荷物にしていくとまだまだかさばるし、計量なのだが、こいつの分の重さが加わると荷物全体がずしとくる。地下鉄の駅まで歩く。このことにより、いろんなリスクがだいぶ経るはずなのだ。

地下鉄の駅に降りていく人物がいた。改札を通るところで「よもや」と思った。ホームに降りて確信した。その人物がこちらをみたときに会釈をした。向こうも儀礼的に会釈を返す。まあ、きっちり挨拶をしようではないか。僕はその人物に近寄っていき、キャップをとってあらためて挨拶をした。「おや」

なるべく驚きを隠しつつ彼は改めて礼をする。

宮本館長である。先ほどまで会議を仕切ってもらった文書館長である。会議にはスーツ姿でのぞみ、おまけにかぶっていたボルサリーノを机の脇にどんと載せていたのだから。今はというと汗染みの残る白いキャップをかぶり、ユニクロのダウンとチノパに身を包みジョギングシューズを履いている。別人に見えてもおかしくはない。

ちよいと変身の楽しさを一人勝手に楽しみ、中洲川端駅で別れた。

ホテルは博多駅前のグリーンホテルアネックス。受験シーズンであちこち高値がついているのにここだけがまだやすかったのだ。しかし、喫煙可の部屋しかなかった。とは言え臭いはさほどではない。備え付けの消臭剤を撒けば問題はなかった。ご機嫌で風呂にはいった。

湯船に浸かり、この一週間の多忙を振り返った。そして一首作ろうかとしたときとんでもないことを思い出した。

〈明日締切の短歌の投稿をしていなかったのだ〉

初めての欠詠になる。いろんな意味でこれはショックだった。

空港のカレー屋が開く六時半懐かしき香に目が覚めてゆく
朝一の成田便ゆゑ窓際の席から順に搭乗させる

山積みの作業片づけ旅先の湯船で気づく投稿のこと

臨席に僕と同じユニクロのダウンを着てるオヤジが座る

※白いキャップは還暦の同期会の時に買ったものだが一夏で汗染みがついて黄ばんでいたものだ。それを一晩漬けおきて洗ったが、黄ばみは残ったままだ。

2016年02月20日

五時二〇分起床。よく寝た。目覚まして起きるとというのはぐっすり眠っていたということだろう。やはりこの一週間の寝不足がここにきてホッとしたのだと思う。まあ、飛行機では寝ちゃうんだろう。

成田便はいくつもの航空会社のコードシェア便になっていた。なるほどみんなこの便で成田から世界に散っていくのだろう。搭乗のやり方もおもしろい。ふつうの便だと後方の席から乗せていくのに、こちらは窓際の席からだ。

飛行機は一五分ほど遅れて離陸した。そして一〇分ほど早く着陸し、定刻にバスに乗り、ターミナルに着いた。列に従っていくと唐突に検査場のようなところとなっている。

「おかしい」

と直感がした。室内を見回すと〈第一ターミナル〉というプレートが目に入った。

「いやややや、ここはちがう。」

とっさにそこに立っていた係員に第二ターミナルの場所を尋ねると「いったん外に出て6番から連絡バスに乗ってください」という。時間は9時10分を過ぎようとしていた。おろおろしながらまずは出口を探して進んだ。どうやら出口らしいところを出て、エスカレーターを降りると広いロビーのようなところに出た。ここが何階なのかもわからない。たまたま案内所があった。。

「第二ターミナルにはどう行けばいいのですか？」

「そこを出て6番です」

「ありがとう」

案内所のそばが出口だったのだ。目の前に10番のバス停がある。右、左とみて左側に9番を見つけ、8番をみつけた。6番は、というと三〇〇メートルくらい先の曲がったところのようだ。バスが停まっている。100メートルばかりに近づいたところで駆けだした。あまり混んではいけないので、余裕はあるのかなと思いつつ席に着くと、「発車します」の音がした。おお、秒の単位でセーフだったか。9時18分だった。

東成田駅とかを経由して第二ターミナルに着く。9時24分になっている。3階まであがろうとエスカレーターに乗るが2階にあがると次のエスカレーターがない。見当をつけて左手に戻るように小走りに行くと右と左にVの字のように2台のエスカレーターがある。ままよ、とばかりに右を選択して上り着いたら、なんと待ち合わせのIカウンターではないか。

「し、しかし、みんなはどこにいるのだ？」

動揺して辺りを見回すが、何も目に入らない。

「困った」

立ち尽くしたままゆっくりかかとを軸に回ってみる。180度回転したところで見覚えのある顔に出会った。

ちょうど九時半だった。

メンバーはリーダーの

チェックインし、出国手続きをする。検査場で引っかかった。福岡でも引っかかったが、シーパップが気になるらしい。先が思いやられる。10時半になっていた。とりあえず清水氏、知本氏とウィスキーを買いに免税店に行くがインドで国内線に乗り換えるところで没収されると聞き、断念する。

そのまま82番ゲートまで行くと搭乗が始まっていた。結局ギリギリ休む間もなく、綱渡りのような移動であった。搭乗前にユニクロをたたみ、Tシャツ姿になっていたが、やおら冷えてきた。機内はやたら冷やし、止める、という「冷房」をするようだ。おかげで備え付けのバンケット(なんと言えればいいのか薄い布だ)には助けられた。

2016年02月21日

コルカタの空港はすばらしいものに変身していた。最初に来たときは古い国鉄の地方駅みたいな空港だったから、驚きだ。周辺に物乞いの姿もない。もとい夜が遅いせいか、近代化されてその余地がないかである。

迎えの車でホテルに向かうが街はコルカタのままだ。角野さんは「意味不明!」と評していた。街の喧噪、車の走り方、建物のものすごさ。廃墟のような建物に灯りがついて人の気配がある。それが夜の街に浮かび上がってくる。生々しい人の息づかいが聞こえる。そうしたものが外界と仕切られた車窓からうかがえるのだ。

ホテルアストリアは懐かしいホテルだ。ロビーは変わることがなくノスタルジックだが、部屋は建て替わってきれいになっている。

昨夜は深夜に簡単な打ち合わせをしてそれぞれの部屋に戻った。じゃんけんで最初は僕が個室となった。シャワーも勢いよく出る。夏なので温度も心地よく身体を冷やしてくれる。洗濯を試みた。

テレビが最新の壁掛けがついているのに映らない。木村部屋は映っていたのに、だ。

で、寝た。よく寝たが、おかしな夢を見た。書類が背景になって真ん中に僕がいる。書類は白地の多い紙で背景としてびっしり埋め尽くされている。「おかしな」と書いたのは背景がはっきりと「白色」に認知される夢だったことだ。

途中目が覚めてまた夢を見ていた。一緒にインドに来ている清水氏が登場していた。やはり旅先で飲み食いをしていて、そういう夢だ。旅先はインドではなかった。

2016年02月22日

昨夜はいわゆるミーティング。お楽しみのラム酒をしこたま飲んでしまった。知本、後藤氏はそこに飲んだようだが、清水氏とは居残って2本目の口を開けてしまった。

で、爆睡。目が覚めたら7時52分。慌てて飛び起きる今日もおかしな夢を見た。白い自動車なのだが、本物なのか玩具なのかよくわからない。三車線の右車線で坂道の上からニュートラルで

放置するところろと走りだし、うまくいくぐって左車線で路肩にぶつかって停まった。僕は駆け降りて何とかしなくちゃ、と思ったところで目が覚めた。夢の続きや意味を考える余裕もなく身支度を整えロビーに降りた。珍しく木村組がまだ来てなかった。今朝はプーリーがあったので、これで芋のカレーをいただく。

本日の目的は死を待つ家。地下鉄で行く。駅の構内に検査場があり、兵士が番をしている。木村氏がそれは通らずにスルーする。続いて僕もスルーするがお咎めなし。木村氏がいつも行くのとは違う出口で降りてみたら、けっこう遠かった。

寺院の中はすごく混んでいたのて死を待つ家に行く。だれもいない。係りの人が中に入っているよ、というので、入れてもらおうと治療中だった。女性は女性専用の部屋に行く。戻ってきたがなかなか女性たちがでてこない。

やがてボランティアの若い日本人の男の子がいたので話をする。昨日と同じく上智の学生であった。当方の女子学生と勝手に盛り上がっていた。再び地下鉄で帰る。

ちょっと休憩して、チェックアウト。荷物をホテルに預けて映画を見に行く。まずはケンタッキーフライドチキンでおなかを満たす。チキンハンバーガーのセットで230ルピー。

チケットは昨日買ってある。「ISHQ forever」。テロリストとの戦いを描いたサスペンス。というよりは単純なロマンスアクション。じゅうぶんに堪能できたが、実は一部眠ってしまっていた。でも、まあわかる内容ではある。それがインドの娯楽映画のいいところだろう。映画の後、ホテルに荷物を取りに行き、地下鉄Park Street駅へ。今度は兵士に金属探知機をくぐらせられる。で、荷物のチェックだが、ぼくは小バッグを点検されだ、背中のリュックはノーチェックだった。

なんたら駅で降りてそこからいろいろな市場を抜けて駅に向かうバナナ、オレンジは壮観であった。さらに肉。ここはかなり異臭が立ちこめていた。そして花市場を抜けるとハウラー橋だ。その前に川原で休憩。カラスと鳩がなにやら餌をついばみ、犬が犬の頭を食い尽くしている。そこで子どもたちが遊んでいる。

ハウラー橋をわたりハウラー駅に到着。例の待合室で時間を過ごす。待合室脇のケータリングショップで水とマンゴージュースを買う。30ルピー。100ルピー札を渡しても「チェンジ!」と言って釣りをくれない。

空腹を覚えたので散歩に行きベジタブルカレー入りパイのようなものを買う。12×2ルピー。

8時くらいに余裕を持って待合室を出る。駅の構内をぐるりと見物して8番ホームへ行く。A1という車両が見つからない。S23とかいう番号が延々続くいったいどれくらいの長さがあるのか。何とかたどり着き、貼ってあるリストに名前を発見してホッとする。

で、席を探す。乗り込んだのはA1の後部。通路をかき分けて先頭まで行くと人がいる。左側に向かい合って神大の席がある。下が1上が2、下が3上が4。通路の右側に進行方向に向かって下が5上が6。

まずは5の席に敷物をしき、その上で祈りの儀式をしているイスラム教徒らしき男がいる。1の席に体格のいい夫婦がいて二人とも旅なれた感じで、女は4(われわれの上段)にあるらしいコンセントから携帯に充電している。男は男は携帯でなにやら話し込んだりしつつ、「これが3、これが4、そして5、6」と教えてくれる。われわれの下段の席に男が一人座っているのだが、これが何者かわからない。

やがて祈りの男は儀式が終わるとにっこり笑い、うやうやしく礼をして、何の問題もなかったかのように立ち去った。おそらくメッカの方向がそちらだったらしい。そのあたりの神経ははかりかね

るが、女性たちはホッとした様子でそこに座った。

残ったのはわれわれの席に同席している男だ。身なりはきちんとしている。そして物静かにじっとすわっている。とりあえずは様子をうかがう感じで清水氏と取り留めもない雑談を繰り返していた。1と2の夫婦者は突然ベッドメイキングをはじめ、おっとは2の席でそそくさと寝てしまう。4（上段）をみるとシートがない。困ったが、どうにもならない。そうこうしているうちに車掌らしき男が通りかかり、シートに気がついて持ってきてくれるが、そのおっさんについては気にも止めない、どこか愛想笑いなどしている（ようにみえる）。「どけ」とは言いにくいので、われわれは実に内容のない会話を続けた。僕と清水氏の長いつきあいの中でこれほど内容のない会話はなかっただろうと言うほどの時間が過ぎていった。

どうしようかというところで清水氏が流暢な英語でおっさんに声をかけた。

「ほかに席があるのですね」

「そうですよ」

と答えるのは1席の夫人だった。

再び重苦しい空気が漂った。1（下段）の夫人もシートをかぶり、睡眠モードはいる。他の客もポツポツ寝始め、5、6の女性たちも「おやすみなさい」と正しい礼をしてカーテンの中の人になった。

8時が9時を過ぎた。どこかの駅に停まった。おっさんに動く気配はない。10時をすぎ、しびれを切らした頃ふっとおっさんは立ち上がり、「ども」とか言ってでていった。おもわず「bye」と返した。おっさんの姿が車内から消えた瞬間、われわれは示し合わせたかのように背にあたる部分を引き倒し（これが下段のベッドになる）、シートを敷き、毛布を上段から降ろした。

「ちょっとトイレに行ってた、と戻ってきたらどうしようか」

「そうなったときの為に既得権を確保しているのさ」

おそらくわれわれの人生でもっとも意味深い会話だったかもしれない。

2016年02月23日

Doon Expressはほぼ定刻で走っていたようだ。夜中の一時頃に灯りがついて騒々しくなったので目が覚めた。どうやら1、2の席の夫婦が降り、新たに子連れの客が乗り込んできたらしい。そこからほぼ1時間ごとに目が覚める。4時半頃に目が覚めたところで木村氏が「どうも定刻通りのようだ。さっき一つ手前の駅を出た。なので準備して」と言ってきた。早速準備をし、下の席に降りて動きを待つ。そろそろかなとデッキの方に行き、到着を待つ。列車の速度が徐々に遅くなり、停まった。木村氏がドアを開けようとするがあかない。上下にロックされているのでそれらを外し、ドアを開けるが様子が違う。あれれ、だ。そうしたらそこにいた白人系の男がスマホを出して見せてくれる。そこには地図の画面が出ていてGPSで現在地が把握できる。そして現在われわれは川を渡る前のところにいた。

2016年02月24日

2016年02月25日

朝6時に集合。ボートで河に出る。ボートは木村氏懇意のビッキーVicky sahani。あの「深夜特急」に出ていた少年が青年になっていた。

絶景であった。

デリーにはほぼ定刻に着く。ここから地下鉄で行く、というので〈METRO〉の看板の方に行くが、その文字が消え、シャトルバス乗り場に着いていた。木村氏がコーナーのカウンターにいる男に聞くとバスで地下鉄駅に向かうのだそう。バスはすぐきた。かなりの渋滞を越えて駅に着く。しかし、切符売り場がない。どうやら保安検査場を抜けてから買うらしい。

保安検査場をとおり、割り込む客に辟易しながら何とか切符を買ってホームに降りる。きれいな駅だフルにホームとレールがガラスの壁で分かれていて、電車がくると扉がスライドして開くという形式だ。

電車が入ってきて、扉が開き、電車のドアも開いた。デッキは非常に広い。広いのだが、そこに大量の荷物が足の踏み場もないくらいに投げ出されていてその山を越えるのがたいへん。何とかクリアして席に着いた。

わかりにくいだろうから繰り返そう。電車は超モダンな電車だ。全体に白のトーンだ。座席や通路もゆったりしている。座席は二人掛けが進行方向に向かって並ぶ形式のもの。ドアから入ると座席のない空間がかなりのスペースであり、それを先ほどデッキと書いた。デッキの両端には大きな荷物用の棚まである。

で、繰り返そう。その棚には荷物は一つも置かれてなく、すべてがデッキ的空間に投げ出されて、山となっていたのだ。

電車がニューデリー駅に着いた。突然同じ車両に座っていた白装束の人たちが荷物に群がり、それらをホームに並べ始めたのだ。それもドアの幅いっぱい、まるで乗降を絶つバリケードのようにだ。ドアの右端をブロックする荷物がまだ一個だったので、それを飛び越えて僕はかろうじてホームに降りることができた。

2016年02月25日+

地下鉄空港線ニューデリー駅は鉄道の駅と少し離れている。地図と現実の落差は大きい。暗い空間の先に駅舎が見える。

「ホテルなんかがあるのは駅の向こう側なんですよ」

木村氏は少し考えて言った。

「まずは行きましょうか。」

木村氏を先頭によくわからない道を越え、よくわからない何かをかきわけて、駅舎に辿り着いた。どうしたら向こう側にいけるのか。木村氏は過去の経験を反芻しつつ、右側の階段を指さした。

「この階段を行けば向こうに行けるはずですよ。」

大きなフードに覆われた階段はまちがいに連絡通路を思わせるものであった。木村氏がその方向に向かい、僕らも後をついていく。階段を上ろうとしたら、若い背の高い青年が駆け寄ってきた。

「そちらからはいけませんよ」

木村氏は無視して歩き続ける。

「だってNO ENTRYですから。向こうに行くにはですねえ、左側に行って、向こうの階段を上るんですよ」

確かにNO ENTRYという表示が見える。われわれは駅舎内に入った。しばし立ち止まって駅舎内を観察する。改札には長蛇の列ができています。遠く左側には確かに階段らしきものが見える。右側にも階段がある。木村氏はためらわず右側にある階段を目指して歩き始めた。階段を中程まで上ったところに先ほどの青年が駆け寄ってきた。

「違う、違う、そちらは閉鎖されていて通れない。あっちに行かないと。」

他に選択肢はありそうにない。われわれは駅舎内を「左側」に向かった。駅なので右手に保安検査場になっている改札口がある。乗客は機械に荷物を通し、金属探知機をくぐって身体検査を受け、中に入る。インドはいたるところこの体制になっている。テロ対策が深刻なのだろう。テロ対策を政治利用している日本とは緊張感がちがう。

駅舎の左端に着くとそこも保安検査場になっていて、やはり改札口であった。どうしたものか逡巡していると検査場のそばにいた男が近づいてきた。

2016年02月26日